

# 単元学習を実践する力量を高めるために

——授業者のためのワークショップ——

片桐啓恵

はじめに

私が所属している研究サークル「ながさき水脈の会」は実践報告中心の月例会からワークショップに絞った研究会へと形態を変えつつある。私自身の現在の最大の関心も、授業を企画・実践する教師の力量を高めるために、教師自身の体験的学習の場をいかに設定するか、という点にある。研究サークルとしての「水脈の会」で、あるいは単発的学習会としてのいくつかの機会、教師のためのワークショップをどのように実現していくか、その成果はどのように現れるか。事例を示して研究会の在り方への提案とし、今後の課題と方向を探っていききたい。

一 なぜ、授業者のためのワークショップが必要なのか？

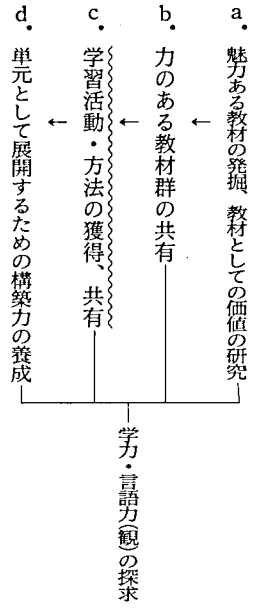
「水脈の会」はこれまで十三年間研究サークルとして続いてきたが、会員個々の多忙化や様々な事情を抱えて次第に月例会に集まる人数が減り、会の維持・存続自体が難しくなってきた。それ

は決して研究会の魅力や役割が減少したからではなく、それだけ教師個々が置かれている職場や家庭の環境が厳しくなっていることを意味している。会の存続の必要性と可能性について何度も話し合いを持つうちに明らかになったことは、次のようなことだった。

- ① 会員が研究会を真に必要としていること。
- ② 多忙で厳しい状況だからこそ、実践の拠り所・指針としての学習会が支えであること。
- ③ どうしても必要な活動を絞るとしたら、実践的力量を高めるためのワークショップがニーズが最も大きいこと。
- ④ 機関誌「水脈」に年間の実践記録をまとめる必要性は会員個々が自覚していること。

そこで、月例会形式をやめ、合宿でのワークショップにエネルギーを集中してみることにした。

なぜ、ワークショップのニーズが高いのか。これまでの「水脈の会」の学習活動をまとめると次のようになる。



月例会では主として a. b. の部分をやってきたことになる。  
 c. d. の部分を高めるためには、レポーターによる実践報告と意見交換だけではどうしてもだめで、教師自身が様々な言語活動・学習活動を体験することでしか得られない。それを集中的に行う方法がワークショップである。

## 二 単元学習は、生きた言語活動が組み立てられてこそ成り立つ

授業者が言語活動を具体的にイメージできなければ、単元学習は組み立てようがない。多様な言語活動を体験していれば、授業組み立ての構想が立ちやすい。

資料からだけでは、どうしてもくみ取れないもの、自ら体験しなければ獲得できないものがある。それは、

- とまどい、つまずき
- 思考回路、感性

おもしろさ、充実感  
 どこで、どんな力を使っているか  
 時間、準備、組み立て

というようなことである。ワークショップは、これらのことを否応無しに体で体験させてくれる。そして、教師自身が体験し、楽しさを味わった学習は、教室の中に生き生きと還元される可能性を持つ。

## 三 「水脈の会」でリクエストの多いワークショップ

「水脈の会」で要求の高い学習活動には、次のようなものがある。(◎は実施したもの)

- ◎折句の詩      ◎シヨートストーリーづくり
- ◎音読・朗読・群読      ◎新聞づくり
- ◎構造図による読み取り      ◎心理地図づくり(構造図の応用)
- ・本作り      ・詩歌カレンダー作り

## 四 ワークショップに気軽に取り組む条件

ワークショップは時間のかかる活動である。限られた時間と条件の中で効率的に行うために、どんな条件を考慮する必要があるだろうか。

- ・取り組みやすく、授業にすぐに活かせるもの
- ・1日〜2日の日程で、基礎的な理論と方法、実践、作品検討

までできるもの

・ワークショップでつくった作品が、授業のモデルとして使えること

内容によって必要な時間は異なるので、比較的簡単に取り組める活動から入門的に行い、参加者のニーズと意欲に応じて段階的に作業課題を組み立てていく必要がある。

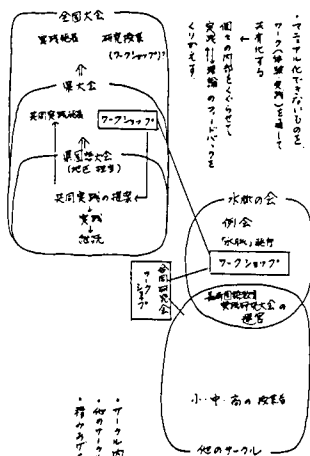
### 五 “ゆるやかな共同実践”の輪を広げる

ワークショップは単発的にも行えるので、研究会のレギュラーメンバー以外でも参加できる。一回のワークショップに体験学習と理論学習が組み込まれていることで、参加者は一回の参加でもその成果を教室に持ち帰ることができる。

また、複数の学校での共同実践を提案し、実行していくことも、広い意味でのワークショップと言えるだろう。授業モデル・作品モデル・教材群モデル・単元構想モデルなどを提案し、共同実践することで、それまで授業を変えようとしてなかなかきつかけや糸口がつかめなかった教師が、新たな授業の方法を体験していくことになる。

今、私は、《ゆるやかな共同実践》の輪を広げていくことが、授業改革の大きなカギだと考えている。そのために、できるだけ多くの授業者が気楽に楽しみつつ力量を高めていけるワークショップや学習会の提案を続けていきたい。

(長崎市立長崎高校)



## 《折り句の詩をつくろう》

◆折り句の詩とは？

「折り句」と言えば、例えば『伊勢物語』の「かきつばた」を折りこんだ「からころも」の和歌などをすぐに思い浮かべますね。句の頭にひとまとまりの言葉を一音ずつバラして折り込んでいく(「ことば遊び」)です。これを現代詩に応用してみましよう。しかも、鑑賞ではなく、作って遊び、交わし、味わう、という活動です。

◆どんなことばの学習ができるか？

「折り句の詩」づくりで行われることばの学習は、以下のよきな点にまとめられます。

- ① ことば遊びを楽しむ、ことばに対する感覚を磨く。
- ② 即興でことばを交わし合うことで、ことばの「活きのよさ」を体感する。
- ③ 句の初めの音が指定されるといふ制約により、言葉を洗いだし、獲得するレッスンになる。(国語辞典と遊ぶ)
- ④ 詩を作って交わし合うことで、自己や他者に対する発見をしたり、ことばで人と人が結び合うということを実感する。
- ⑤ 物語名や登場人物名の折り句は、作品のトータルな理解や感情移入レッスンにもなり、言葉遊びをしながら作品を身近なものにする。

五つの点のいずれも重要なことです。特に現代の高校生のことばの力、とりわけ人間としての活きる力、他者に関わる力を考えるとき、真にことばの感覚を磨く学習は大変重要です。しかし、ことばのセンスやエッセンスという領域ほど、教室という場で取り組むことが難しいものも他にはないのも事実です。

詩歌はことばのセンスに関わるジャンルです。鑑賞の仕方なるものを教えることはたして可能でしょうか。背景や側面的な知識を与えることはできても、センスは教えられません。とにかく、たくさん触れて、感じるしかない。けれども、詩歌、いや、ことばのおもしろみ、そのものに興味を持たなければ、自分で詩集や歌集・句集に触れることもないでしょう。教科書に載っている数編に触れるだけでは、それもテストのために人から教えられた知識を丸覚えしているだけでは、ことばのエッセンスにふれるという域には絶望的に届かない。

詩歌も散文も、実はすべてのことばの学習は、自らが表現するという必然性と体験と実感があって、初めて理解活動が有効になる。これは、もうわかりきったことです。ただ、理解活動中心の教室現場で、どうすれば有効な表現活動が実践できるのか。これが永遠の課題なのです。

そこで、いつでも、どこでも、だれでも、簡単に取り組めて、

とてもよく効く学習活動を提案します。その一つが「折り句の詩」づくりです。

国語の学習のみならず、ホームルームでも使える活動、古典学習や文学史のまとめとしても使える活動です。

◆学習の進め方(ワークシヨップの例) 20人で想定

4人でグループをつくる。さらに、その仲で2人ずつのペアをつくる。

国語辞典は一人一冊が望ましい。

ワークシートNo.1・No.2

(1)自分の名前で

モデル作品を使って、作り方を説明

← 詩作にトライ(5分間)

← 自己紹介 (10分間)

グループ全員に向かって自分の詩を読み上げる

詩で工夫した点、苦労した点も含めて、自己イメージをア

ピール

ペアのパートナーの自己紹介を聞き取ってメモを取る

(2)パートナーの名前で

相手の名前を折り込んで、相手に贈る詩をつくる(5分)

← ペアで読み合う(2分)

(3)ひとままとまりのことは折り込んで

モデル作品を使って、作り方を説明

「花の香り」「草の雫」「秋の訪れ」「渡り鳥」など簡単な単語を折り句にして。そのことが詩のテーマにもなる。

← 試作にトライ(8分)

← グループで読み合う(2分)

(4)物語名や登場人物名を折り込んで

モデル作品を使って、作り方を説明

グループで一つの作品を決め、シリーズ風に登場人物をとりあげるのも楽しい。

← 詩作にトライ(8分)

← グループで読み合う(2分)

学習のまとめ(8分)

《折り句の詩》づくりの学習で育つことばの力、実践上の留意点など。

◆《折り句の詩》づくりのための基礎レッスン、発展応用

短詩づくりのレッスンとして、題を与えての三行詩づくりを時々行う。

(この場合、三行にこだわらず、数行の短詩でよい。)

五十音折り句連詩(ア行、カ行…)を分担してもよい)に挑戦する。テーマをたてての連詩の会《詩合わせ》を開く。

折り句の詩をつくらう

(氏名)

1. 自分のお名前と折り句

(お名前)

かみゆかり

ふたつて

さ 長寿の神も自分様で

り 神様もさう喜んでもら知

ら 広げなせよ

う 神様をまごころ

え 福にいらは こんは自分様

わ カンロン 天福

に フラフロ エキゾア

り ずんずん 酒の味

り 難の神やへいど、赤ひ

り ひんやり 比風

う ロンドン 歌声

え エイヤと 天馬の音

2. パートナリの名まえと折り句

(お名前と折り句)

自己紹介しましう

(自分の名まえと折り句を)

パートナーの自己紹介を聞いてメモをとらう

折り句をつくらう

Blank box for writing the student's name and their own haikai.

Blank box for writing the partner's name and haikai.

Blank box for writing the student's haikai.



ながさ水紙の巻のりフシニア ちぢ

折リ句の詠をつくらう

(12)

芭蕉

あ たり上は  
い つもまに西日か 背し  
う 葉はく  
え 吹雪のまは  
お 落りてくるは 夜  
か かりは  
さ 野路のこゝろ  
く くらとく 入陽  
り 日影と  
こ しのすやう 終りにけり  
さ であま ませたり  
し 静かに 待とう  
お とう(てい)よう  
せ 世間は 聞か入 眠りてく  
そ へからか 手紙にちの 世界  
た に向ふに 天候か 歌い  
ち かなは 羽を 垂おせり  
つ つてたて  
と 大團へん 道  
と 原か けり 行こつ  
な 流氷の 群と  
に 二階の 窓から  
め 振り出してお 子  
の 寝問着の じまへ  
の ノウタイ ンの中へ

よ 風法の 團が 待てる  
み 力て こん  
む ねのほは 子の ちまが  
め へん たい たい たい  
む せやくの ように たい  
や かのて  
中 空から ちめり 手紙に  
よ 夜の けし  
ら たいら くの せの  
り けり ほん たい  
ち 増城の 色のか 拍と 流す たい  
れ 神乳の 色のか 朝の 光か 詠た  
ち けり たい  
わ 流す たい  
と 愛(こ)よ たい たい たい

ながさ水紙の巻のりフシニア ちぢ

折リ句の詠をつくらう

(13)

芭蕉

あ たり上は  
い つもまに西日か 背し  
う 葉はく  
え 吹雪のまは  
お 落りてくるは 夜  
か かりは  
さ 野路のこゝろ  
く くらとく 入陽  
り 日影と  
こ しのすやう 終りにけり  
さ であま ませたり  
し 静かに 待とう  
お とう(てい)よう  
せ 世間は 聞か入 眠りてく  
そ へからか 手紙にちの 世界  
た に向ふに 天候か 歌い  
ち かなは 羽を 垂おせり  
つ つてたて  
と 大團へん 道  
と 原か けり 行こつ  
な 流氷の 群と  
に 二階の 窓から  
め 振り出してお 子  
の 寝問着の じまへ  
の ノウタイ ンの中へ

日本舞の巻のりフシニア ちぢ

あ たり上は  
い つもまに西日か 背し  
う 葉はく  
え 吹雪のまは  
お 落りてくるは 夜  
か かりは  
さ 野路のこゝろ  
く くらとく 入陽  
り 日影と  
こ しのすやう 終りにけり  
さ であま ませたり  
し 静かに 待とう  
お とう(てい)よう  
せ 世間は 聞か入 眠りてく  
そ へからか 手紙にちの 世界  
た に向ふに 天候か 歌い  
ち かなは 羽を 垂おせり  
つ つてたて  
と 大團へん 道  
と 原か けり 行こつ  
な 流氷の 群と  
に 二階の 窓から  
め 振り出してお 子  
の 寝問着の じまへ  
の ノウタイ ンの中へ





